

世界を恫喝する北朝鮮のロジックとは——

核実験、ミサイル発射、そして「天安」撃沈の秘密・・・
「核保有国」北朝鮮の軍事・外交行動を解明する、待望の通史。

道下徳成 著

国際政治・日本外交叢書

北朝鮮 瀬戸際外交の歴史

——1966～2012年



ISBN978-4-623-06557-8 C3331 A5判上製カバー394頁 本体4800円(税別) 2013年6月刊行予定

核実験、ミサイル発射に隠された意図は何か。そして哨戒艦「天安」撃沈の秘密とは。1966年から2012年までの北朝鮮の軍事・外交行動を体系的に分析することで、そのパターンとロジックが明らかになる。非武装地帯、黄海での攻防から、核・ミサイル外交、平和条約まで、北朝鮮の瀬戸際外交を各国の秘密解除文書、そして脱北した北朝鮮の元幹部をふくむ各国関係者へのインタビューを用いて読み解く決定版。

ここが
ポイント!!

- ◎ 北朝鮮の軍事・外交に関する待望の通史
- ◎ 核実験やミサイル発射など、瀬戸際外交を続ける意図を読み解く

《目次》

プロローグ 新たな瀬戸際外交の幕開け	8 停戦体制の無力化工作——1993～2002年
序 北朝鮮の瀬戸際外交を読み解く	9 第二次核外交——2002～08年
1 瀬戸際外交の歴史	終 瀬戸際外交の有用性と限界
2 非武装地帯の攻防——1966～68年	エピローグ 金正恩時代の瀬戸際外交
3 プエブロ号事件——1968年	註
4 西海事件——1973～76年	あとがき
5 板門店ポプラ事件——1976年	資料編
6 第一次核外交——1993～94年	インタビューリスト
7 ミサイル外交——1996～2000年	人名・事項索引

《著者紹介》

道下徳成 (みちした・なるしげ)

1965年岡山県生まれ。筑波大学卒業。ジョンズ・ホプキンス大学博士課程修了。国際政治学博士。防衛省防衛研究所主任研究官、内閣官房副長官補(安全保障・危機管理担当)付参事官補佐などを経て、現在、政策研究大学院大学准教授。
共編著に『中曽根康弘が語る戦後日本外交』(新潮社、2012年)、『シー・パワー』(芙蓉書房、2008年)、『危機の朝鮮半島』(慶應義塾大学出版会、2006年)、『現代戦略論』(勁草書房、2000年)、ほか。

道下徳成著

『北朝鮮 瀬戸際外交の歴史——1966～2012年』

(ミネルヴァ書房、二〇一三年、三六七頁)

西野純也

朝鮮半島の安全保障問題について第一線で活躍する研究者による本格的かつ重厚な学術書である。あとがきに記されている通り、本書は著者が二〇〇二年にSAISへ提出した博士論文に、その後の情勢や新資料を反映させて書籍化したものである。著者は二〇〇九年に博士論文をもとにした英文書籍 *North Korea's Military-Diplomatic Campaigns: 1966-2008* (Routledge) を出版しており、本書の記述の多くはこの英文書籍に負っている。

しかし、単なる英文書籍の翻訳として終わっていないところに、著者の苦勞と良心を見てとれる。プロローグとエピローグを追加して二〇〇九年以降の動き、とりわけ金正恩時代の瀬戸際外交について言及し、あわせて本書全体を通して日本の読者が理解しやすいよう翻訳や記述への工夫がなされている。本書は国際安全保障学会の二〇一三年度最優秀出版奨励賞を受賞し、二〇一四年には韓国語版が刊行されるなど、国内外で高い評価を獲得している。

本文二八七ページ、註八〇ページからなる専門書であるが、読者

が本書の内容を理解しやすい構成となっている。まず、序章において本書の結論を簡潔かつ明快に提示し、続く第一章で一九六〇年代後半以降の北朝鮮による瀬戸際外交の歴史を概観する。第二章から第九章までは各章ごとに八つの事例研究、すなわち(1)一九六六～六八年の非武装地帯での攻防、(2)一九六八年のプエプロ号事件、(3)一九七三～七六年の西海事件、(4)一九七六年の板門店ボラ事件、(5)一九九三～九四年の第一次核外交、(6)一九九八～二〇〇〇年のミサイル外交、(7)一九九三～二〇〇二年の停戦体制無効化工作、(8)二〇〇二～〇八年の第二次核外交、を扱っている。終章では、序章で示した結論を再確認しつつ、事例研究を踏まえた敷衍説明を行っている。

したがって、読者は序章と終章に目を通せば、事例研究により得られた発見と本書の主張を容易に知ることができるし、第二章から第九章は各々独立した緻密な歴史叙述としての価値を有している。事例研究は、事実関係の記述/環境要因の分析/軍事・外交行動の特徴/政策目的とその達成度/瀬戸際政策のマイナスイ効果、という順序からなる統一フォーマットで構成されており、非常に分析的ではあるが、同時に膨大な関係各国一次資料やインタビューを活用することで読み応えのある豊かな叙述にも成功している。

本書の目的は、「北朝鮮が外交の手段としてどのように軍事力を使用し、その結果、どの程度、政策目的の達成に成功し、あるいは失敗したか、そして、北朝鮮が達成しようとした政策目的にはどのような変化があったのかを明らかにすること」である。なぜならば、

「これまで、北朝鮮の軍事行動についての包括的な研究が不十分であったため、関係各国の政策担当者や専門家は不十分な知識や断片的な逸話に基づいて北朝鮮の行動を理解し、あるいは政策判断せざるをえなかった」のであり、「体系的かつ歴史的な分析を通じ、北朝鮮の行動様式を理解するために必要な、詳細かつ有用な基礎を提供することを試みる」(六頁)との問題意識を著者が持っているからである。

一九六六年から二〇一二年まで四六年間におよぶ北朝鮮の軍事行動に対する綿密な分析を通じて、本書の目的は十分達成されたと言つてよい。主要な結論として、(1)北朝鮮の政策目的は時代とともに野心的かつ攻撃的なものから限定的かつ防衛的なものへと変化した、つまり、初期には朝鮮半島や国際情勢の現状に変更を加えようとしたが、九〇年代以降はもっぱら自国の体制維持を目的とするようになった、(2)北朝鮮は政策目的を達成するための合理的な手段として軍事力を用いてきた、(3)北朝鮮が軍事行動をとる「場」は局地的な軍事バランスの変化により規定されてきた(一九六〇年代はDMZ周辺と東海岸、七〇年代は西海五島周辺、八〇年代は朝鮮半島の外部、九〇年代以降は核やミサイル開発)、(4)北朝鮮は過去の経験から教訓を学び、時とともに軍事行動と外交活動をより巧妙に結びつけるようになった、ことが導き出されている。

加えて、北朝鮮の瀬戸際外交の特徴として、攻撃能力だけでなく米韓両国の報復を防ぐ「抑止力」も重要な役割を果たしていること、北方境界線(NLL)の争点化や核不拡散防止条約(NPT)

脱退宣言に見られるように「法的问题」を利用してきたこと、北朝鮮を取り巻く国際環境の良し悪しとは関係なく軍事行動をとってきたこと、短期的成果をあげても中長期的には否定的結果をもたらすことがあったこと、なども本書は明らかにした。以上のうちいくつかは、これまでも専門家により指摘されたことはあったが、「体系的かつ歴史的な分析」により実証的に解明されたのは初めてであり、本書の学術的貢献は多大である。

北朝鮮の軍事外交を分析対象とし、また包括的かつ緻密な分析に徹しているがゆえに、著者が研究遂行に際し数多くの課題に直面したことは想像に難くない。おそらく、そのひとつが北朝鮮の政策目的の推定と目的達成度の評価であろう。北朝鮮指導部の意図をどう読み解くか、が本書のみならず北朝鮮研究が避けては通れない難問だからである。「北朝鮮の公式文獻や秘密指定された各国の外交文書、そして北朝鮮を含む関係各国の政策担当者などの手記・回顧録などが最も重要な情報源」であり、「脱北者の証言も積極的に利用」(二一―二三頁)したことで、本書はこの課題を見事に克服している。北朝鮮の文獻や資料に大きく依拠してきた従来の北朝鮮研究の方法を取り入れつつも、国際化し多様化した北朝鮮問題の現実に見合う形で米韓両国の資料や脱北者証言を縦横無尽に駆使した点こそ、本書最大の強みである。

他方で、北朝鮮指導部の意図に関する疑問が尽きることはない。本書は、慎重ながらも、「国内政治は北朝鮮の瀬戸際外交の主たる決定要因ではなかったが、一定の影響は与えたと考えられる。」「しか

し全体としてみると、北朝鮮が国内政治上の問題を解決するために軍事行動をとってきたとする見方は正しくない(二八〇―二八一頁)との立場をとった。しかし、本書(英文書籍、韓国語版含む)に対するいくつかの書評(Poikton 37:2-3 (2010) © Scott Thomas Bruce、「防衛学研究」第四二二号(二〇一〇年三月)の渡邊武、「KINU統一ブラス」創刊号(二〇一五年四月)の具甲祐らによる書評)は、軍事行動と国内政治要因との関連についてより注意深い検討の必要性を喚起している。

著者もこの点には自覚的である。「外部からは知ることのできない政治上の理由によって瀬戸際外交が影響を受けていた可能性を排除することはできない」として、「国内政治要因の重要性については、今後とも検討を続けていく必要がある」(二八二頁)と記している。また、プロローグにおいて、「二〇〇九年から二〇一〇年にかけての一連の軍事行動は、もっぱら北朝鮮の国内政治上の必要性によってとられたものであり、それ以前の瀬戸際外交とは異質なものの」(二二頁)との見方を示したことから、金正恩時代の軍事行動と国内政治の繋がりに関する著者の更なる分析が待たれるところである。

最後に、英文書籍では Military-Diplomatic Campaigns (軍事外交攻勢)と名付けた北朝鮮の軍事行動を本書では「瀬戸際外交」とした点が、素朴な疑問として残った。広辞苑(第六版、岩波書店)によれば、「瀬戸際」とは「安危・成敗・生死のわかれる、さしせまった場合。運命のわかれめ」であり、大辞泉(第二版、小学館)によると「瀬戸際外交」とは「相手国からの譲歩を引き出すため、あえ

て緊張を高めるような挑発的な外交。また、その政策」である。著者がなぜ新たにこの言葉を選択し、どのような意味を込めたのか、言及が欲しかった。評者の理解では、一九九〇年代以降の北朝鮮の軍事行動は一般的に瀬戸際外交とみなされるが、それ以前の行動を瀬戸際外交とした言説は多くない。もちろん、本書を通じて北朝鮮の瀬戸際外交の特徴は十分解明されたのだから、これは瑣末な疑問かもしれない。

重厚ながらも読みやすく、社会科学的分析、豊かな実証的叙述、そして政策的インプリケーションの三拍子が揃った本書は、北朝鮮研究としても軍事外交研究としても新たな高みに到達した良書である。本書の分析枠組みを用いた、より本格的な金正恩時代の分析が待たれるところである。

(にし の じゅんや 慶應義塾大学)

編集後記

「新興国台頭と国際秩序」の展開を歴史的観点から捉える。その特集号の編集責任者としての打診を受け、そうある機会でもあるまいと思ってお引き受けることになった。

今だからということで正直に言えば、その際に脳裏をよぎったのは、実に今日的な興味深いテーマだということが一つ、そしてもう一つは、特集号の諸論文として具体化しようとする、果たしてどのようなものになるのか、なかなか検討がつかないという一抹の不安であった。本特集号が歴史系のものであり、実証的な歴史研究をベースにして欲しいとの指示を編集委員会から受けたことも関係していたのであろう。

つまり、理論やある種の図式で「新興国台頭と国際秩序」をダイナミックに把握する研究は比較的目にするものの、一次資料を駆使する歴史研究者がこのような、あえて言えば大風呂敷の土俵にどの程度、乗ってきてもらえるのかという若干の懸念であった。

募集に際してできるだけ間口を広げる努力を試み、寄せられたプロポーザルに加えて、当方から相当数の依頼も行った。第二次世界大戦以前の局面についても、より多く論考に含めることができると念じていたが、結果的には戦後の比重が当初の予定よりも大きくなった。とはいえ各位の協力を得て、アクターや問題設定、それぞれの時代など、近現代の世界史そのものといえるようなこのテーマについて、多彩な切り口が揃ったのではないかと考えている。冒頭

のような杞憂を抱いた私にとっては、大変貴重な学びの機会であった。

さて今号で一八三号を数える伝統ある『国際政治』だが、本号のテーマと類似した特集を過去に求めようとすると、第三九号「第三世界」(一九六八年)などがかるうじてそれにあたりと見える。新興独立国が「第三世界」として主張を強めていた一九六〇年代当時にあっても、それは「第一世界」「第二世界」を含めた国際秩序全般を塗り替えるものとは必ずしも捉えられなかったであろう。

そうであれば二〇一〇年代も中盤にさしかかる現在、「新興国と国際秩序」が特集たりうることが照射する今日の風景というものはあるはずである。

振り返ってみれば米ソ冷戦終結後にはアメリカ一極論が世を席巻し、それを「帝国」として捉える議論も盛んであった。それからさして時をおかずして、中国を筆頭とする「新興国」が国際秩序をどう塗り替えるのかという潜在的問題意識で編まれた今回の特集号である。今号がこの先さらに蓄積されていく『国際政治』特集号の歴史の中で、後世どのようなものとして見えるのか、それもまた興味深いことであるように思われる。

本特集号に応募された方々、寄稿された執筆者各位、そして多忙をおして査読を引き受けて下さった本学会会員の皆様に対して、ここに心からの感謝を申し上げる次第である。

軍事行動の“合理性”解明

北朝鮮研究は、日本統治下の朝鮮研究および共産圏研究の蓄積を土台として、わが国がリードしてきた。しかし1990年代、とりわけ金大中政権による北朝鮮文献の閲覧制限解除に伴い、韓国で膨大な量の研究が出された。その結果、日本の北朝鮮研究は後れをとったかのようにも見えたが、ここにきて再び高水準の研究が目につく。本書も特筆すべき一冊となる。

著者は、防衛省防衛研究所、内閣官房などを経て政策研究大学院大で准教授を務める気鋭の研究学者であり、既に英文での単著を持ち、発信力について定評がある。

北朝鮮の軍事行動について包括的な研究が不十分であったとの問題意識のもと、北朝鮮の瀬戸際外交の歴史を時期区分し、とりわけ重要性の高い事例について詳細な分析が加えられている。

北朝鮮が米情報収集艦を拿捕(だほ)したプエブロ号事件(68年)、黄海で軍事危機を招いた西海事件(73~76年)、米兵2人を殺害した板門店ポプラ事件(76年)と、現在に至る「核・ミサイル外交」

「北朝鮮 瀬戸際外交の歴史」(道下徳成著)

を、一つの文脈で捉え直すことに成功している。

北朝鮮の政策目的は時代とともに、野心的かつ攻撃的なものから、限定的で防衛的なものへと変化してきたことが実証される。また北朝鮮の指導者たちは、その政策目的を達成する合理的手段として軍事力を用いてきたことが明らかにされる。

一方、その軍事行動は局地的な軍事バランスなど構造的要因で促進ないし制約された。最近の研究動向でもあるが、多様な資料で北朝鮮なりの論理を解明する試みである。

明確な評価基準の設定と論理構成が著者の強みだろう。そのため、重厚な研究書ながらも全体を通して読みやすい。巻末のインタビューリストも圧巻である。資料的制限の多い研究分野では、文献のみならず関係者への聴取能力も問われる。

わが国における北朝鮮研究の一つの到達点として高く評価され、後進としてはハードルを上げられた印象だ。(磯崎敦仁・慶応大専任講師)

(ミネルヴァ書房・5040円) = 2013年8月15日④配信